国際交流センターでスタッフと話す学生。たくさんの資料も揃っている。

― 国際交流・海外研修 ―
グローバル人材の育成・支援制度

政治や経済においても国際問題が注目される昨今、日本は、国際感覚を身につけた人材の育成が急務です。文部科学省でもグローバル人材の育成が推奨され、企業にも強く求められる今、広島国際大学では国際的に活躍できる人材の育成に取り組み、海外研修や国際交流に力を入れています。

グローバル人材の育成

近年急激に、新興国を含む全世界がグローバル標準に沿ってきました。どの国も国際市場に目を向けた経済活動を行っています。日本は、もとより生活を輸入に頼り、経済は輸出に頼り、自国だけでは存続できない国。加えて現在、企業は規模の大小を問わず海外展開を進めています。そんな中、大学生は「内向き」と評され、企業の動きに逆行する様相を呈しています。

広島国際大学では、大学の使命として、国際交流センターを設置し、さまざまな取り組みでグローバルな人材の育成を目指し、海外を目指す学生を支援しています。

国際交流・海外研修の取り組み

本学には、海外での文化交流や語学研修、ボランティアなどを体験するプログラムに加え、学部や学科が主体で実施する、薬学や看護学などの専門海外研修があります。今年度は海外提携校などでの語学レッスンや、ホームステイ、異文化理解の体験など、7カ国・12コースが大学のサポート体制のもと、企画・実施されました。

ユニークなプログラムとして「学生短期海外研修支援制度」があります。学生自身が企画した海外研修を公募し、審査に合格すれば大学から資金が援助されるというものです。準備や計画に時間を要し、手配等も自分で全て行うことになりますが、学問を追求したり、興味あるものを体験・学習したり、自由な発想で企画できます。毎年、2～3名の学生が、このプログラムに採用され、資金援助を得て自らの足で海外に行き、自らの手で大きな収穫を得て戻ってきます。

本学は、海外からの留学生の受け入れも行っています。現在、アジアを中心とした国々から留学に来ており、在籍者は70人以上。キャンパス内に海外からの留学生がいることで、自然に海外の文化に触れる機会ができ、交流が生まれ、国際的な感覚が養われることを目指しています。

また、学生による学生のための国際交流活動を検討する「学生国際交流委員」を組織し、日本人学生と留学生とが共に活動しています。学内外での国際交流イベントや、異文化体験を通じた地域貢献などを行っています。

国際交流センターにはスタッフが常駐し、海外への研修や留学の相談に応じる。

「はじめの一歩」としての海外研修

学生の中には、海外渡航は初めてで、飛行機にも乗ったことがない、という人もたくさんいます。そこで、ファーストステップとして、大学の国際交流プログラムを活用することはとても有益だと思います。

実際には、2～3週間で一気に何かが身につくわけではありません。しかし、広い世界を知るきっかけが、まずは大切だと思います。国際感覚を身につけるための第一歩として、各自が課題を見つけ、そして、次のステップへ進んでほしいと考えています。短い期間でも海外研修を終えた学生たちは、驚くほど成長して帰ってきます。ぜひご両親にもその姿を見ていただきたいです。もちろん、国際感覚を身につけた学生は就職にも有利です。

現在、新たに進めているのは、セメスター（学期）留学制度です。提携校の選定や、語学研修や単位認定制度などを整えて、本格的な留学に取り組む計画を進めています。

学生短期海外研修 制度説明

■制度の主旨
教育理念「各領域で活躍しうる職業人を育成し、地域社会と国際社会に貢献する」のもと、広い視野で国際問題を理解できる人材教育の一環として、学生の海外研修の実現を支援する。

■支援の概要
大学は「海外で勉強したいという学生希望」の支援・実現を目的に、30万円を上限に研修費用を支援する。

■研修期間
10日～1ヵ月（夏期休業期間内に実施）

■応募要件など
学部2年次以上または大学院に在籍する者。個人またはグループでの応募が可能。但し以下の要件を満たしたものに限る。

［要件］
○各自が異なる研修目的（内容）であること。なお、選考委員会が同様の研修内容と判断した場合は選考から除外する。
○各学部・学科が実施する正課プログラム及び語学研修等と同様の研修内容と選考委員会が判断した場合は選考から除外する。

国際交流・海外研修 体験リポート

海外ボランティア研修 <カンボジア>

心理科学部　臨床心理学科2年　野村 佳生さん

自分の目で見て、肌で感じることが本当の国際理解につながると感じた

いろいろな経験をし、文化に触れたいという思いがあり、特に新興国に興味を持っていました。国際交流センターを訪ねたときに、カンボジアの研修を知り、その場で参加を決めました。

現地で行うボランティアや文化交流の内容は、日本から行く学生21人（常翔学園3大学の学生）で全て話し合いながら決めます。インターネット上に掲示板を開設して、みんなで意見を書き込んだり、定期的にテレビ会議をしながら計画を立てていきました。

現地での活動拠点は、地元の高校だったのですが、そこでは勉強できることは喜びであり、同時に周りから託された期待で、生徒たちは一生懸命に勉強をしていました。その様子を見て、自分が恥ずかしくなりました。

カンボジアで見たもの、触れたものは、日本とは全く違う生活です。毎日、頭からあふれそうなくらい「何か」を感じ、頭の整理が追いつかないくらいでした。

この研修では、「得られた」ことよりも「考えさせられた」ことのほうが多かったと思います。インターネットやテレビだけでは絶対に分からないものに触れられたことが大きな収穫で、自分の人生観が変わりました。

学生短期海外研修 <オーストラリア>

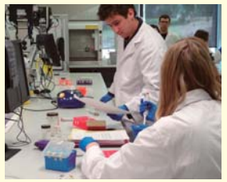
保健医療学部　診療放射線学科3年　中原 慧美さん

専門分野の勉強に、異文化体験。多くの経験ができた貴重な研修

学生短期海外研修支援制度を利用して、先生の紹介によりメルボルンの大学へ、放射線技師の教育と、放射線治療の研究を学びに行ってきました。この研修制度で採用されるためには、具体的で綿密な研修計画を盛り込んだ企画書が必要で、出発の1年前から、メルボルンの先生とメールなどでやりとりしながら研修内容を決め、準備を進めました。

現地では、大学の講義に出席し、病院などの見学をしました。大きく刺激を受けたのは、学生の授業に取り組む姿勢、意識の高さです。講義を聴きながら、メモをびっしり。だれもが意見や質問を次々に発言します。「このままじゃいけない。もっと勉強しないと！」と強く思いました。

期間中はホームステイだったので、オーストラリアの生活や文化にもたくさん触れることができました。温かい人に囲まれ、異なる文化にたくさん触れたことで世界観が広がり、気持ちが大きく前向きになったと感じています。



自分で計画を立てて、準備して、実践する、というのは大変でしたが、達成感は言葉にはできないものがあります。準備から研修を終えるまで、思っていた以上に心に残るものとなりました。